

仕合わせの和



第223号
令和2年 10. 1
(毎月1日発行)

身延山から池上へ

住職 谷川寛俊

今月十三日は、日蓮大聖人七三九回目のご命日を迎えます。俗に「御会式(おえしき)」とも良い、日蓮聖人にお目にかかる日でもあります。全国の日蓮宗寺院では、十月十三日前後に御報恩の法要が厳修されます。真成寺では、例年十一月三日に大法要が厳修され、檀信徒の皆様方と共に御徳び申し上げます。

今月号では、身延山から御入滅の地・東京池上本門寺でお亡くなりになられたご様子をお話し致します。

身延山に入られて九年間、御年すでに六十歳。長い間の激しい法華経・お題目の修行と受難の連続によって、老年の身は衰えて病気がちでした。今と違って七百年前は身延山の谷間という居住条件の悪い場所は、健康を蝕み、特に下痢の持病に悩まされ続けておられました。

いよいよ秋も深まり、朝晩の冷え込みが身に染みる頃となったので、大聖人の身を案じたお弟子や信者のすすめもあり、湯治療養(とうじりようよう)のため、常陸国(ひたちのくに)茨城県

を目指されました。波木井実長(はきいさねなが)公(かつて身延のお山を提供された方)の愛馬に乗馬し、九月八日身延山を出発されました。十日間を駆け九月十八日、ようやく武蔵国(むさしのくに)東京の大信者である、池上宗仲(むねなか)公の館に到着します。長旅の為、翌日は筆も持てないほど弱っておられました。大聖人は、とてもこの状態では常陸の湯まで行けないと悟られ、九ヶ年間お世話になった波木井公にお手紙を出されます。それがあの有名な「たとえ、いづくにて死に候とも、墓をば身延山に建てさせ給え」と御遺言されています。そして九月二十五日頃には、少し良くなられ、鎌倉や他所から病状を案じて集まって来た人達に『立正安国論』を講義されました。しかし、池上宗仲公の館で養生していた大聖人は、十月に入ると立つことも出来ないくらい日に衰弱していかれました。やがて死を悟った聖人は、十月八日にお弟子の日興(にちこう)上人に代筆させて法華経実践を指導できる上位の弟子六人を決め、一門の後事を託されました。後世に「六老僧(ろくろうそう)」と呼ばれる日昭(にっしょう)・日朗(にちろう)・日興(にちこう)・日向(にっこう)・日頂(にっちょう)・日持(にちぢ)の

各上人で、日蓮大聖人は「本弟子」と呼ばれました。十月十二日、いよいよ臨終の近いことを悟られた大聖人は、北に向かって座られ、十月十三日辰の刻(午前八時頃)多勢のお弟子や信者達の読経の中、静かに臨終にられました。この時、日昭上人が打ち鳴らす臨滅を知らせる鐘の音が響き渡りました。(真成寺でも毎年お会式法要中に鐘を十回打ち鳴らしています)。池上邸前にあった桜の木に時ならぬ花が咲き誇りました。これを御会式桜(おえしきざくら)と呼んでいます。翌十四日午後八時頃、日昭・日朗の両上人によって入棺の儀。翌正午に葬送の儀が行われ、お弟子や信者達の葬送の行列は、池上の西谷に向かいました。ここで火葬にされ、十六日の御取骨。そして御遺言にしたがって、大聖人の御遺骨は身延山に埋葬するため十月二十一日池上を出発しました。私達が毎年身延山に参拝するとき、必ずお参りする所が大聖人の御廟所(ごびようしょ)お墓(お墓)であり、九ヶ年間お住まいになられた御草庵跡(住居)です。

真成寺ホームページ

玉蓮山 真成寺

編集部 谷川久仁子
TEL・FAX 0765-22-2268
携帯 080-3744-2523
こちらの番号でもお寺につながります。

お会式桜



まだ、ご参拝になられてない方は、ぜひ一度お参りください。このようにして大聖人の足跡を偲ぶと改めて自らの信行増進に務めなければならないと思います。

